

## ぶも 父母恩重経



(株) ファルコン  
出口 明夫  
Deguchi Akio  
(建設部門)

このお経の名前を初めて知ったのは、30年以上も昔、民法講座の研修を受けたときであった。講師は弁護士の長谷部一美先生で講義は非常にユニークで面白かつ有意義であった。

その講座の最後の締めくくりで、黒板に「父母恩重経」と大書し、よく覚えていないが「世の中には親子、夫婦、相続などのトラブルが非常に多いが法律云々のまえに、とにかくこのお経を一度読んでみてください。」との趣旨の一言があったと思う。

そのときは、読まなくても概ね中身が想像できる気がし、恩重という言葉にも抵抗感があって、読む気にもならなかったが、お経にしては珍しい名前であること、読み方が“ふぼ”でなく“ぶも”であることが印象的で、長谷部先生の名講義とともにこのお経の名前がいつまでも妙に頭に残った。

その後、随分経ってから本屋で偶然「ひろさちや」の「仏説父母恩重経」の本に出くわし、「これだ」と思い、何か長年の憑き物を落とすような気分で読んでみる気になった。さっと読んで、宗教的な教えというよりも素晴らしい詩に出くわしたような何とも言えぬ感動で素直な初心に帰らせてくれた思いであった。

内容についてあれこれ綴るのはやめにしたい。まずは、少し長くなるが難しいところは省略・簡略化して読み物として印象的なところを抜粋する。

「仏の説きたる父母の恩の重きを教えた経」

かくの如く われ聞けり。

あるとき、仏注①、王舎城の耆闍崛(ぎしゃくつ)注②山中に、菩薩・声聞(しょうもん)注③の衆と ともに ましましき。…一切諸天の人民…法を聞き奉らんとて、来たり集まり、一心に宝座を囲んで、瞬きもせず、尊顔を仰ぎみ奉りき。

注① 仏：釈迦如来のこと 注② 王舎城の耆闍崛：2500年前、お釈迦さま時代にインドのマカダ国の首都である王舎城の南方にある山で、ここでお釈迦さまは、晩年、説法をされた。

別名を靈鷲山(りょうじゆせん)ともいう。注③ 菩薩・声聞：「菩薩」は仏の位の次にあり、悟りを求め、衆生を救うために多くの修行を重ねる者。「声聞」は仏の説法を聞く者。

このとき、仏…法を説いて宣(のたま)わく。

一切の善男子・善女人よ、父に慈恩あり、母に悲恩注④あり…父にあらざれば生まれず、

母にあらざれば育たず…悲母の子を思うこと、世間に比(たぐ)いあることなく、その恩、未形注⑤におよべり。はじめ胎(たい)に受けしより、十月を経るの間、行・住・坐・臥、ともにもろもろの苦悩を受く。苦悩休むとき無きが故に、常に好める飲食(おんじき)・衣服を得るも、愛欲注④の念を生ぜず、ただ一心に安く産まんことを思う。

注④ 慈恩、非恩：「慈」はいつくしみいたわる愛であり、わが子をじっと見つめている愛。

「悲」はあわれみいたむ愛であり、身をもってわが子を抱きしめ守る愛。

注⑤ 未形(みぎょう)：生まれる前。 注⑥ 愛欲：愛着

月満ち、日足りて、生産(しょうさん)のときいたれば、業風注⑦吹きて、これを促し、骨節ことごとく痛み、汗膏(あせあぶら)ともに流れて、その苦しみ耐えがたし。父も身心戦(おのの)き恐れて、母と子とを憂念(ゆうねん)し、諸親眷属(しよしんけんぞく)みな悉(ことごと)く苦悩す。すでに生まれて、草上注⑧に墜(お)つれば、父母の喜び限りなきこと…その子、声を発すれば母も初めてこの世に生まれ出でたるが如し。

注⑦ 業風(ごうふう)：悪業の報いとして感じる猛風のこと、地獄で吹くという大暴風雨。

注⑧ 草上：畳の上

それよりこのかた、母の懐(ふところ)を寝床(ねどこ)となし、母の膝を遊び場となし、母の乳を食物となし、母の情を生命(いのち)となす。飢えたるとき、食を求むるに、母にあらざれば喰らわず。渴(かわ)けるとき、飲み物を求めるに、母にあらざれば咽(の)まず、寒きとき、着物を加えるに、母にあらざれば着ず。暑きとき、衣(きもの)を脱(と)るに、母にあらざれば脱(ぬ)がず。母、飢えにあたるときも、含めるを吐(は)きて、子に喰らわしめ、母、寒さに苦しむときも、着たるを脱ぎて、子に被(かぶ)らす。

母にあらざれば養われず、母にあらざれば育てられず…母の乳を飲むこと、一百八十斛注⑨となす。父母の恩重きこと、天の極まりなきが如し。

注⑨ 1斛(こく)=1石=180匁

母…傭(やと)われて、あるいは水汲み…あるいは白挽(ひ)き、種々のことに服従して、家に帰るのとき未だ至らざるに、今やわが児(こ)、わが家に泣き叫びて、われを恋い慕わんと思ひ起こせば、胸さわぎ、心驚き、ふたつの乳流れ出でて、忍び耐うることをあたわず。すなわち、去りて家に帰る。

児、遙(はる)かに母の来たるを見て、揺籃(ゆりかご)の中にあれば、すなわち、頭を揺(ゆる)るがし、脳(なづき)を弄(ろう)し、外にあれば、すなわち腹這いして出でたり。空泣(そらな)きして、母に向かう。母は子のために足を早め、身(からだ)を曲げ、長く両手をのべて、塵土(ちりつつ)を払い、わが口を子の口に接(つ)けつつ、乳を出してこれを飲ましむ。このとき、母は児を見て歓び、児は母を見て喜ぶ。両情(りょうじょう)一致、恩愛のあまねきこと、またこれに過ぎるものなし。

二歳、懐(ふところ)を離れて、初めて歩く。父にあらざれば、火の身(からだ)を焼くことを知らず。母にあらざれば、刀(はもの)の指を落とすことを知らず。

三歳、乳を離れて、初めて食らう。父にあらざれば、毒の命を落とすことを知らず。母にあらざれば、薬の病(やまい)を救うことを知らず。

父母、外に出でて、他の座席に行き、美味珍食を得ることあれば、自らこれを喰らうに忍びず、懐に収めて持ち帰り、呼び来たりて、子に与う。十度(とたび)帰れば、九度(このたび)まで、子に与う。…これを得れば、すなわち歡喜して、かつ笑い、かつ喰らう。

やや成長して、朋友(ほうゆう)と相交わるに至れば、父は着物を求め、帯を求め、母は髪を梳(くしけず)り、髻(もとどり)を摩(な)で、己が好みの衣服は、みな子に与えて着せしめ、己は、すなわち古き着物、弊(やぶ)れたる着物をまとう。

すでに妻を求めて、他の女子を娶(めと)れば、父母をば、うたた疎遠にして、夫婦はとくに親しみ近づき、私房(へや)の内において、妻とともに語らい楽しむ。

父母、年たけて気老い、力衰えぬれば、頼るところのものは、ただ子のみ。頼むところの者は、ただ嫁のみ。しかるに夫婦ともに、朝より暮れに至るまで、未だ敢えて一度も来たり問わず。

あるいは父は母を先立て、母は父を先立てて、独り空房(くうぼう)を守りおるは、あたかも旅人の、ひとり宿に泊まるがごとく、つねに恩愛の情なく、また談笑の楽しみなし。夜半、寢床冷ややかにして、五体安んぜず…幾度か転々反則して、独りつぶやく。噫(ああ)、吾(わ)れ何の宿罪注⑩ありてか、かかる不孝の子をもてるかと。

事ありて、子と呼ばば、目を瞋(いか)らして怒り罵(のの)しる。嫁も児も、これを見て、ともに罵り、ともに辱(はずか)しめば、頭(こうべ)をたれて笑いを含む。嫁もまた不孝、児もまた不順、夫婦和合して、五逆罪注⑪を造る。

注⑩ 宿罪(しゅくざい)： 前世で犯した罪　注⑪ 五逆罪： 仏教において父母殺しなど五つの最も重い罪

あるいはまた急用おこりて、急ぎ呼びて命ぜんとすれば…かえって怒り罵りていわく、老い耄(ぼ)れて世に残るよりは、早く死して、この世を去られたしと。父母これを聞いて、怨念胸に塞(ふさ)がり、涕涙(ているい) 臉(まぶた)をつきて、目瞋(くら)み、心惑い、悲しみ叫びて曰く、噫(ああ)、汝(なんじ)幼少のとき、われにあらざれば養われざりき、われにあらざれば育てられざりき。しかして今に至れば、すなわちかえって、かくのごとし。噫(ああ)、われ汝を生みしも、もとより望みは外れたりと。

もし子あり、父母をして、かくのごとき言(ことば)を發せしむれば、子はすなわち、そ

の言とともに墜ちて、地獄・餓鬼・畜生の中にあり。一切の如来・金剛天・五通仙注⑩も、これを救い護ることあたわず。父母の恩重きこと、天の極まりなきがごとし。

注⑩ 如来・金剛天・五通仙：「如来」は仏と同じ。「金剛天」は仏に近侍して護衛の任にあたる仁王のこと。「五通仙」は五つの神通力を持った仙人

- 善男子・善女人よ、わけてこれを説けば、父母に十種の恩徳あり、何をか十種となす。
- 一には、懐胎守護（かいたいしゅご）の恩  
懐妊中、母は身も心もくだいて重病のようになりながらも、ただ一心にお腹の子を思うのみである。
  - 二には、臨産受苦（りんさんじゅく）の恩  
出産の時、陣痛の苦しみに耐え忍ぶ。
  - 三には、生子忘憂（しょうしぼうゆう）の恩  
出産し赤子の顔を見れば、自分もはじめて生まれてきたような喜びに染まり、心身の苦しみを忘れる。
  - 四には、乳哺養育（にゅうほよういく）の恩  
子を養うこと数年なれば、容貌（かたち）すなわち憔悴（しょうすい）するほど乳を飲ませ、養育する。
  - 五には、廻乾就湿（かいかんじゅしつ）の恩  
乾いた所に子を寝かせ、湿った所に自ら寝る。
  - 六には、洗濯不浄（せんかんふじょう）の恩  
子がふところや衣服に排泄するも、自らの手にて洗いすぎ、不潔をいとわない。
  - 七には、嚙苦吐甘（えんくとかん）の恩  
食物を口に含みて、自らは不味いものを食べ、美味しいものは子に食べさせる。
  - 八には、為造悪業（いぞうあくごう）の恩  
子供のためには、止むを得ず、悪業をし、地獄に落ちるのも甘んじる。
  - 九には、遠行憶念（えんぎょうおくねん）の恩  
子供が遠くへ行ったら、帰ってくるまで四六時中心配する。
  - 十には、究竟憐愍（くきょうれんみん）の恩  
自分が生きている間は、子の苦しみを一身に引き受けようとし、死後も、子を護りたいと願う。

父母の恩、重きこと天の極まりなきがごとし。

善男子・善女人よ、かくのごときの恩徳、いかにしてか報すべき。

しかるに長じて人となれば、声を荒らげ、気を怒らして、父の言に順わず、母の言に瞋（いかり）を含む。すでにして妻を娶（めと）れば、父母に背き違（ちが）うこと、恩なき人のごとく、兄弟を憎み嫌うこと、怨（うら）みある者のごとし。妻の親族来たりぬれば、奥の間に迎え入

れて、饗応し、己れが室に入れて歓談す。嗚呼(ああ)、噫嗟(ああ)、衆生顛倒注⑬して、親しき者は、かえって粗末に扱い、疎き者は、かえって親しむ。父母の恩重きこと、天の極まり無きがごとし。

注⑬ 衆生(しゅじょう)顛倒(てんどう)：主客転倒、本末転倒

以上がこのお経の前半の概略であり少しオーバーであるが、父母の恩重きことが具体的日常生活の姿で分かりやすく表現されている。

後半はこの父母の重恩に如何に報いるか、が説き示されている。お経としては後半が重要なものかもしれないが、前半あつての後半であり、かつ読み物としては前半が感動的である。

このお経は子へ注ぐ愛情・親心の深さなど親のこころを分かりやすく説き、子供を思う親心をハッキリ気づかせてくれる。特に母が何をしてくれたかをよく知ることができる。また、子供が成人した後の親子・嫁舅姑の関係などは、時代を超え2000年以上も経た現在においてもどこにでもよく見られる事柄と思われる。そのオーバーな表現に思わず苦笑いが出るとともに、本質においてわが身にも覚えあり忸怩たる思いに駆られる。

近年親が子を虐待し子が親を殺める目を覆いたくなるような、親子の事件が頻発している。何故だろうか。

生活が苦しい時代は、ぎりぎりの生活の中でわが身を犠牲にしても子供の育みを優先した。今、飽食の時代は生活に余裕が出来、あれこれもっともらしい理屈をつけて、実は子育てより自分を優先する傾向がみられる。家族よりも個人を尊重する思想も強まっている。また、…のために、とか、…に尽くすとか、の自己犠牲的心情は戦前の忌まわしい思想に通じるとして極端に否定される傾向もある。また、過度な期待から子どもに大きな負担を強いたり、逆に子どもを慰みものにしてペット化している一面も見える。豊かさに慣れて親子ともに忍耐力の低下もあろう。様々な要因が重なって現代の世相となっているのであろう。

それとも情報が過多となり特異な事件が頻発しているように錯覚しているだけではないだろうか、とも思う。

科学技術は蓄積が出来るので時代とともに長足の進歩ができるが、人間個々の心情や人格形成などは一代限りであり、根本的には何千年の昔からそう大きくは変わっていないのではないかと思う。

だからこそ純真無垢な幼少期からの愛情、しつけ、教育、宗教などによる教化がその子の生涯の人間性の決め手となるのではなかろうか。子育てにおいて動物のほうが人間よりもはるかに一途に懸命であり、けな気であると思われるときがある。人間は動物より知能が優れているだけに子育てを誤れば、逆にとんでもない人間になりかねない。人は原点に

返って動物に学ばなければならないことがあるのではなかろうか。

このお経は父母恩重経といいながら父はほとんど蚊帳の外、母ばかりとの印象である。「母の情を生命(いのち)となす」、昔は今のように行政も医療も頼れるすべは何一つとなく母子のつながりはともに命がけで、母の役割は絶大である。今は育メンとかいって父の子育て参加が促進されているが、父がどこまでできるのか、我々世代にはよくわからないところがある。自分は、乳幼児の子育ては母の専業ぐらいに思っていた。しかし、これは核家族時代の今では全く通用しない、父の役割は重要であり積極的な参加が必要である。しかし、また育メンの重要性がもの言わぬ子供の目線でどれほど捉えられているのかとも思われる。

このお経はお釈迦さまが多くの弟子たちや大衆の前で説法した形で作られているが、実は中国で唐代以前の古い時代に作られたお経で“偽経”と言われている。中国や日本で作られたお経はたくさんあるそうで、その中でも父母恩重経は中国、朝鮮、日本で古来、よく読まれているそうである。

お経は何万とあるが、すべてお釈迦さまが亡くなられた後に作られたものであり、何百年も後に作られたものも多数あるので“偽経”と言って区別するのは適切でないとも言われている。

「般若心経」は多くの人によく知られているが、自分には難し過ぎて読んでもよくわからない。解説を読んでも解るようでわからない。また、様々な「真言」なども意味がわからずには有り難くもなく覚える気にも唱える気にもならない。自分の勉強不足を棚に上げて開き直っているのであるが、こうして法事はいつも忍耐のいる空虚な時間となっている。法事には具体的でわかりやすい父母恩重経を唱えたらよいと思う。

お経は僧侶など専門家だけのものではなく普通の人を読んでそれなりに分かるようであれば、役に立たないのではなかろうか。少なくとも法事などでよく使われているようなお経はわかりやすく説かれた書物がもっと身近に誰にでも手に入るようにし、親が子供に教えられるようにしなければ、仏教はますます廃れてしまうのではないかと思われる。

長谷部先生の勧めで、せっかく比較的若い時にこのお経を読む機会を得、感動はしたものの信仰心や宗教心の乏しい自分はこの教えのほんの少しも身につけることなく父母を亡くした。そして今、「孝行のしたい時分に親はなし」と後悔している体たらくである。遅まきながら積み重ねた不孝の数々を詫びるとともに、柄にもなく信仰心や宗教心が少しでも芽ばえることを祈りながら四国霊場の巡拝でもしようかと思う。もちろん車で。